本を選ぶ

NO.427 2020年(令和２年)12月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

http://www.las2005.com

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●＜ろん・ぽわん＞＝
●鳥の目　８２
●『古代エジプト人の24時間』
●コロナ禍と出版界
●本で知る 同時代の台湾

ろん・ぽわん

＝

印刷所で「下駄を履かせる」という言い方を耳にしたのは活版印刷の時代だった。初校のゲラ(校正刷り）を見ているときの話だ。印刷業界に限らずどんな業界にもその分野に独特の言葉があるけれど、職人たちに由来を聞くと、明快な解説もあれば、さあ昔からそう言っているからね、などという答も多く返ってくる。この下駄という言葉の場合は符牒と専門用語の中間くらいの印象だ。

「下駄を履かせる」を普通に聞けば、水増しするとか値段を高く偽るとかの意味になるが、これはそうしたあざとい話ではない。活字組版の印刷所では、文選(ぶんせん)と呼ばれる職人が活字棚から原稿にある文字に当てる活字を１本１本拾って来る。その際、原稿に判読不明の文字や、たまたま手許で在庫を切らした活字があった場合、その文字を＝に置き換えた臨時の措置をする。＝という文字つまり活字があるわけではない。活字の底には溝が切られていて＝の形になっており、それをひっくり返して表側にして代用していた。さらに次の工程では文選工から文選箱に入った活字一式を受け取った植字工が、約物（句読点や記号など）と合わせて版面を組んで組み上げていく。そこで＝が組み込まれていく、即ち「下駄を履かせる」のだ。

当然、初校が終わって再校正の折りには、＝はしかるべき文字に直されるはずだ。稀な事例とは思うが、かつてゲタを履かされたままになっている本と遭遇した記憶がある。印刷所も出版者も再校で見落としたうっかり者だが、こちらも書名は失念してしまっている。

活版印刷がほぼ廃れてから写真植字組版や電子組版の時代になり、活字を使わなくなってからもこの＝は「ゲタ記号」と称して受け継がれているから面白い。現に今でもワードや一太郎で「げた」と打てば、変換候補に＝が現れる。ワープロやＤＴＰが普及してからでも、第二水準の文字群にも入っていないような人名漢字、あるいは難字とか旧字や異体字などのいわゆる外字は都度作字するしかなく、校正刷りの段階では一時しのぎにゲタを履かせておく。かつてのワープロには、標準的な書体であれば作字機能を持つ機種も備えていて重宝した。デジタル化が進んだ今では難なく出来るようになった。

海外行きの飛行機の深夜便に乗ると、消灯後でもギャレーに行けばカップ麺などスナックやおやつの用意がありますよ、と案内される。ギャレー(galley）とは調理室という意味のようだが、廊下の片隅程度のコーナーで、夜更かしの人たちがグラス片手におしゃべりしていたりする。そしてゲラを英語ではgalley proofと言うらしい。印刷所では組み上がった活字原版が頁単位で並べられた盆のような木箱をゲラ箱と言っていた記憶があるし、ゲラ刷りという言葉にも結びつく。(埜村 太郎)

鳥の目 82

――アオサギ ― 幻想をさそう鳥――

為貞　貞人

存在感ある水辺の鳥

身近な川や池に立っても飛んでも存在感を示す水辺の鳥にアオサギがいます。アオサギ（英名 Grey heron）はペリカン目サギ科アオサギ属に分類されます。世界にはサギ科の鳥は 15 属 72 種が分布し、アオサギ属はアオサギのほかダイサギ、チュウサギ、ムラサキサギなど 9 種が数えられます。アオサギはユーラシアからアフリカ大陸まで 4 亜種が広く分布し、ロシア極東のアムール川流域、シャンタル諸島、南サハリンおよび日本列島でその 1 亜種が繁殖し、東アジアのサギ類の中で最も北方まで生息し、高緯度の鳥は東アジアや東南アジアで越冬します。

アオサギは全長 90 ㎝前後で、日本では最大のサギです。翼を開くと大きくて 170 ㎝にもなり、サギ類一般の三つの特徴① S 字型に曲がる長い首、②鋭く長いくちばし、③細く長い脚をもち、体の上面が青灰色で、頭部が白く、左右の眼の上から後頭に黒い羽毛が伸びています。飛び立つときや飛行中に「グアー」とよく鳴き、脚を後ろにひいて悠然と飛ぶ姿が印象的です。

アオサギ像の系譜

生物学者で動物生態学が専門の佐原雄二さんは著書『幻像のアオサギが飛ぶよ』（家伝社／ 2016 年）でアオサギをめぐる東西のイメージの系譜を、日本とヨーロッパの詩や小説などを渉猟して比較、紹介しています。例えばイギリスのケネス・リッチモンドの小説『アオサギのガース』（*The Heron Garth*, 1946）では、主人公のアオサギの「ガース」がふ化して様々な経験をして成長し、空中でシロハヤブサと互角に闘って死にます。その勇敢さから、佐原さんは「孤独で孤高で精悍なもの」が英国の伝統的なイメージとして見ています。

アオサギは中世のイギリス貴族の鷹狩りでの最も名声ある獲物であり、しばしば Crane（ツル）と呼ばれ、a piece de resistance（主な料理）として晩餐会の呼び物でした。　英国にはほかに夏にたまに現れるムラサキサギがいますが、一般に「ヘロン」と言えばアオサギを指し、ヘロンあるいはヘロンリー（Heronry サギの営巣地）は家、農場、土地の名称として記念されています。（*Birds of British Isles*, Edited by Jim Flegg, BLACK CAT, 1988）

日本はイギリスなど西欧に比べサギの仲間が多い国で、サギ科の鳥がおよそ 19 種生息し、うち 16 種が繁殖します。日本にサギ類が多いのは、北海道を除き弥生時代から平野に水田が広がり、江戸時代 17 世紀には新田開発により溜池や水路が増え、こそに生息するドジョウなどの小魚やカエルなどサギ類の餌が豊富なことによります。こうした歴史的背景から、日本のサギ観の形成に米作との関係があり、銅鐸（神戸市立博物館蔵）に描かれているサギらしい「長頸・長脚鳥」がその解明の一つの手掛かりとしてあげられています。

佐原さんは「弥生人もまた、緑の水田を餌場として飛翔するサギの姿に生命力の発露を見てとることで、霊性を感受し豊かな稔りを観想した」という辰巳和弘氏の言説（「弥生・古墳時代人の動物観」（西本編『人と動物の日本史 1　動物の考古学』／ 2008 年）に注目し、銅鐸の鳥について「水田で人目を惹くサギ類は、古代人には穀物（イネ）の豊穣を約束する霊的なものに見えたと考えて無理はない」と述べています。そして古代人から霊性を付与されたサギは、時代が下がるとともに変質し、「日本において動物神の多くは動物神徒または妖怪のいずれかに転じた」（中村禎里著『日本動物民俗誌』／ 1987 年）という論説により、アオサギの妖怪化、そして「憂鬱で不気味な」アオサギ像が日本に出現したと佐原さんは考えます。

10 世紀前半に編纂された『倭名類聚抄（わみょうるいじゅしょう）』には蒼（あお）鷺（さぎ）が和名「美止佐木（みとさぎ）」、五位鷺（別名鵁鶄（あおさぎ））が和名「伊微（いひ）」と記載され、鷺は和名「佐支（さぎ）」で「色純白」と記され、アオサギとゴイサギおよび白鷺（ダイサギなど）が早くから区別されています。しかしサギ類の形態、行動、鳴き声の類似でアオサギ、ゴイサギが混同され、またダイサギを含め「鷺」として一括して見られることが多かったと思われます。

さて、不気味なアオサギの説話の特徴は「光物（ひかりもの）」

の出現です。鎌倉時代の『吾妻鏡』の建長8年（1256年）6月14日の条に「巳の刻に光物が見え長五尺余りその体は初めは白鷺に似て後は赤火の如しその跡白布を引くが如し」との記述があります。また、元禄10年（1692年）の『本朝食鑑』（水禽）には「およそ五位鷺は夜飛ぶときは火のような光があり月夜に最も明るい」とあり、今日に至るまで青白く光るアオサギやゴイサギの目撃談が絶えません。

絵画では江戸時代の鳥山石燕の『今昔画図続百鬼』（1779年）の全身から怪しい光を放つアオサギの絵「青鷺火」や恋川春町の戯作『妖怪仕内評判記』（1779年）のアオサギの化け物などの「妖怪アオサギ」の時代を経て、不気味なアオサギ像は明治に引き継がれ、泉鏡花の『竜潭譚』（1896年）、『鷭狩』（1923年）、『神鷺之巻』（1933年）などの小説では多くは白鷺が「うつくしい女」の化身や幻像として現れています。

その他日本の近・現代文学での「憂鬱なアオサギ像」として、薄田泣菫の詩集『十字街頭』（1909年）所収の「鷺脚」や入沢康夫の長詩『わが出雲・わが鎮魂』（1968年）があがっていますが、佐原さんが特に注目するのが、戦後飯能市に移り住み詩集『岩魚』で知られる詩人蔵原伸二郎の「蒼鷺」（詩集『東洋の満月』／1939年）です。

「見たまへ。／蒼鷺が飛んでゆくよ、暗い地底から幻像の青鷺が飛ぶよ。／俺は不思議な原始の想いを、脳の奥底深く秘くし、哀れな蒼鷺となって、遠い山脈の湿地方へ翔けてゆこう。」

太平洋戦争へ向かう時代の流れの中で「哀れな蒼鷺」に変身した詩人が飛んでいく先はどこなのでしょう。そして「あまたの季節を飛躍し、星辰を飛躍し」、「憂鬱の川岸の、朱い果実でも喰つて、だれも居ない、大自然の奥の沼沢地方で、水を切つて、泳がう、泳がう。」と詠っています。

憂愁のアオサギ

アオサギは水田や河川、池などの開けた水辺で魚類やカエル類、大型の水生昆虫を餌にします。アオサギは通常単独で、採餌の方法はおもに浅い水辺でじっと動かずに待ち伏せするか、ゆっくり歩いて餌を見つけて獲ります。時代は違いますが次の二句、「夕風や水青鷺の脛をうつ」（蕪村）や「洲に立てる青鷺ひとつサロマ川」（水原秋桜子）には水辺に立つ粛然としたもう一つのアオサギ像が浮かび上がります。また北海道の詩人の更科源蔵の「蒼鷺」（詩集『凍原の歌』／1943年）には、厳粛な姿に情熱を秘めたアオサギが登場しています。「蝦夷榛に冬の陽があたる／凍原の上に青い影がのびる／青鷺は片脚を上げ／静かに目をとじそして風を聴く（中略）耳毛かすかに震え／寂寞の極みに何が聞こえる／胸毛を震わす絶望の季節か／凍れる川の底流の音か／それとも胸にどよめく蒼空への情熱か」

アオサギは北海道や青森県など北日本では夏鳥で、3月には南方から渡ってきて4月に営巣活動に入り、8月に南への渡りを開始し、中には越冬する個体も見られます。また北日本ではアオサギ一種のコロニーでの営巣が多く、南にいくにつれてダイサギ、コサギ、アマサギなどとの混同のコロニーが増え、特にカワウが混じります。巣は丘陵や海岸近くのマツや広葉樹の梢につくられ、毎年同じつがいが同じ巣を修繕して使います。

ところが近年、地域によってはアオサギによる養魚場や河川での食害や稲の踏み付けの被害などを理由に駆除申請が提出され、環境省発表では平成8年度から平成22年度まで40都道府県で駆除され（関東6県と青森県は駆除なし）、その総数は19030羽に達しています。その駆除数は年々増加し、平成8年度に全国で8羽だったのが平成22年度には3412羽になっています。北海道アオサギ研究会の全国都道府県や市町村のアンケート調査等の報告書（2014年11月）では、ほんの数文字「有害だから」と書いて申請するだけで駆除が許可される不適切な自治体の鳥獣管理のあり方が指摘されています。

現代の歌人馬場あき子は「かすかなる存在の闇さびしげに脚なびけゆく青鷺の群」（歌集『ふぶき浜』1981年）と詠っています。繁殖を終えた渡りでしょうか、それともコロニーへ急ぐ一群でしょうか。1980年代のこの歌には、すでに今日の「存在の闇」を予感するように、黒い風切と灰色の雨おおいのコントラストも鮮やかに、首を縮め脚を後に伸ばして飛ぶアオサギになぜか深い憂愁がただよっています。（ためさだ　さだと：さいたま市図書館友の会）

『古代エジプト人の 24 時間』
―3500年前の人々の暮らし―

市川 恵里

独特の様式の色鮮やかな壁画とヒエログリフで飾られた墓や神殿、巨大ピラミッド、ミイラ、黄金の宝飾品、動物の姿をした神々――神秘的な魅力を湛える古代エジプトは今もなお人気が高く、関連書籍の刊行や展覧会の開催が相次ぐほか、漫画やアニメといったポップカルチャーのモチーフにもなっている。だが一般には、古代エジプトといえば、荘厳な遺跡、神々と宗教、王家の人々の物語に焦点が当たることが多く、無名の庶民の日常生活が詳しく取り上げられることはめったにない。

今回、ご紹介するドナルド・P・ライアン著『古代エジプト人の 24 時間』（河出書房新社 2020 年）は、古代エジプト人の暮らしぶりを驚くほどリアルに描き出した秀逸な歴史読み物である。イギリスの出版社マイケル・オマーラ・ブックスの「古代史 24 時間」シリーズの１冊で、これまでに古代ローマ、古代アテネ、古代中国が出ているが、邦訳はこの古代エジプトが初めてになる。

『古代エジプト人の 24 時間―よみがえる 3500 年前の暮らし』ドナルド・P・ライアン著／大城道則 日本語版監修／市川恵里訳／四六判 240 頁 定価 2530 円（税込）／河出書房新社 2020 年 12 月刊

本書の舞台は、紀元前 1414 年頃、新王国時代第 18 王朝、アメンホテプ２世時代の首都テーベとその周辺である。エジプトが拡大と繁栄を謳歌していた時代だった。この本では、ある１日の 24 時間を１時間ずつ 24 章に分け、各章でひとりの人物に焦点を当てて、その生活と人生を物語形式で綴っている。王、王妃、宰相、監督官、神官、医師、王の扇持ち、建築家、書記学校の生徒、ミイラ職人、老兵、農夫とその妻、漁師、陶工、煉瓦工、木工職人、泣き女、踊り子、墓泥棒など、社会の頂点から底辺まで、実にさまざまな職業、身分の人々が登場する。特に一般の歴史書では見過ごされがちな庶民の日常生活をクローズアップしているのが興味深い。

王と王妃、宰相など一握りの人物を除く大部分の登場人物と筋書きは架空のものだが、単に想像力で作られた虚構の話というわけでもない。著者は王家の谷での発掘調査にも携わってきたアメリカ人考古学者であり、この本で書かれていることには、かなりの部分、歴史的事実の裏づけがある。加えて、個性的な登場人物ひとりひとりの人生のディテール、その苦労や喜びが、ユーモアを交えて、小説のように生き生きと描かれ、さながら古代エジプト人の暮らしに密着したドキュメンタリーを見ているような心地がする。彼らの物語を通じて、当時の社会と文化のありようを知ることもできる。

遺体に入れた切れ目から内臓を取り出してミイラにするミイラ職人や、川辺のパピルスで小舟を作る漁師、水浴びの際、ワニに脚を噛まれた煉瓦工と、そのけがを治療する村の医師、祝宴の音楽に合わせ、ほぼ全裸で踊る若い踊り子たち、王妃の墓に忍びこんで宝物を盗み出す墓泥棒……。神の化身とされる王さえも、悩みをもつ生身の人として人間くさく描かれている。古代エジプト人がこれほど身近に感じられる本も珍しいかもしれない。初心者から専門家まで幅広い読者が面白く読むことのできる、このとびきり楽しい歴史読み物を、古代エジプトに少しでも興味をもつすべての方におすすめしたい。

なお、現在、日本では、「ライデン国立古代博物館所蔵 古代エジプト展」と「国立ベルリン・エジプト博物館所蔵 古代エジプト展 天地創造の神話」という２種類の古代エジプト展が開催中で、各地に巡回する予定もある。コロナ禍の影響で残念ながら開催中止になった地域もあるが、近くで開催された折には、ぜひ（感染予防にも細心の注意を払いつつ）会場に足を運んでみてほしい。

（いちかわ えり：翻訳者）

コロナ禍と出版界

能勢 仁

新型コロナウィルス感染症によって、社会生活も私生活も激変してしまった。旅行、観光、ライブ、食産業等多大の被害を受けている。

出版業界の様子を見てみよう。業界的には営業活動がストップしてしまったので、出版社は悩んだ。大型企画が発表できなかったことも、今年の特色である。出版の制作面はテレワークによって、著者～編集者の関係は保たれ、在宅編集の可能により、働き方改革の先取りをした格好であった。大型書店、チェーン店の営業自粛のために販売成績は良くなかった。しかし皮肉なことに大学の教科書、専門書は売れた。これは例年教授が買うことを言っても、先輩のお下がり、古本で済ませていた。ネット授業の教科書、補助教材として本を買わざるを得なかった。コロナ社会の皮肉な一面であった。

ゴールデンウィークに外出することは出来なかった。その反動がガイドブック、旅行誌に顕著に出た。「地球の歩き方」シリーズはその最たるものであった。

負の面ばかり追いかけたが、在宅は読書を促した。コロナ特需といえば不謹慎であるが、自宅学習用に親が小学生向け参考書を買い求め、1～9月期累計で20%伸長した。中でもドリルが爆発的に売れた。「うんこドリル」で有名になった文響社の商品の売れ行きは異常であった。6年前の販売金額は6億円であったが、今期は30億円を超す勢いである。学校が再開されても、学習の遅れを取り戻そうとするニーズで、売れ行きは落ちなかった。休校のため在宅することになった子供は読み物をよく読んだ。「鬼滅の刃」のノベライズや「ざんねんないきもの事典」などもヒットした。この他にロングセラーであるエンデの「モモ」や「大どろぼうホッツェンプロック」も読まれた。

コロナ禍で売れた書籍にアルベール・カミュ「ペスト」がある。累計125万部に達したという。混乱期の生き方を書いた五木寛之のベストセラー「大河の一滴」も復活し読まれた。

テレワークの影響で、コンピュータ書、ビジネス書にも追い風が吹いた。テレワーク関連書は30～50点出版され、店頭には催事売場が作られた。在宅勤務だけでなく、出社してもリモート会議が増え、PC書は必需品になった。「世界一わかりやすいZoomマスター」「Zoom基本＆便利技」などである。ビジネス書では「危機の時代」「会社四季報・業界地図」などである。巣篭り需要では、自粛期間にパンやお菓子作りが流行し、スーパーではホットケーキミックスや強力粉が品切れになった。書店では「菓子」関連書が60%伸びている。この他「パズル本」「脳トレ」「ぬりえ」「家庭菜園書」「釣り」の本が伸びた。

永井荷風がスペイン風邪流行の大正八年正月十五日の「断腸亭日乗」の記述の中で「風邪未だ癒えず」と書いている。翌日には「余既に余命いくばくもなきを知り、死後の事につきて心を労すること少なからず」と記している。荷風は死を覚悟した。しかし正月二十二日では「悪熱次第に去る」と書いている。荷風が一度は死を覚悟した事がわかる。新型コロナがスペイン風邪同様にならぬことを願うばかりである。

話題を変えよう。NHKが最近、書店、出版、読書等について時間を割くようになった。NHKテキスト「趣味どきっ」10～11月号で、こんな一冊に出会いたい「本の道しるべ」を毎週火曜日Eテレｐｍ9：30～9：55で放送している。再放送も総合とEテレで行っている。ナビゲーター菊池亜希子（女優）、本屋案内・和気正幸（本屋ライター）である。

毎回ゲストが異なる。1～8回の人物は次の通り。

平松洋子、矢部太郎、渡辺満里奈、祖父江慎、橋本麻里、穂村弘、飛田和緒、坂本美雨である。

もう一つの放送は「本好きなら一度は行きたい！世界の美しすぎる名物書店」である。2020年8月18～19日、二夜連続でNHK総合で夜9時台に放送された。パリの「シェークスピア書店」、中国・南京市の「先鋒書店」で、圧巻の内容であった。

（のせ　まさし：ノセ事務所）

本で知る 同時代の台湾
――リアルな台湾の“いま”を伝える本が続々翻訳

三浦 裕子

台湾の作家が書いた本を読んだことがありますか？

タピオカがブームになったり、修学旅行先として採用する高校も増えたりと、この数年、日本の若い人々が「台湾」に触れる機会はかつてないほど多くなっているかもしれません。また、コロナウイルス流行に対する政府の迅速で的確な対応や、若き天才 IT 担当大臣オードリー・タン氏の存在などに驚いた人も多いでしょう。でも､「台湾の書籍」は、日本でいま人気の韓国の本ほどには注目されていないようです。

私たち太台本屋 tai-tai books は、同時代台湾の本当に面白い本を日本に広める活動をしています。ここでも台湾の本について、少しご紹介します。

台湾は、知られざる出版大国です。台湾の国家図書館の統計によると、2019 年の新刊点数は 3 万 6810 点。同年日本の新刊点数は 7 万 1,963 点ですので、日本の約半分の点数です。でも、台湾の人口が日本の約 6 分の 1 であることを考えると、台湾の“人口一人当たりの新刊刊行点数”は、ざっくり計算して日本の約 3 倍という計算になります

実は日本でも毎年 10 点ほどの台湾の本が、コンスタントに翻訳出版されています。ただ、少し前まで、日本で出版される台湾の作品の多くは、台湾文学の研究者などが選定、紹介する、比較的重い文学作品でした。もちろんそれらは台湾の重要な作家の作品ではあるのですが、テーマや内容は、日本の一般的な読者、特に若い読者には身近に感じづらいものだったと思います。

そんな状況を変えたのが、呉明益著、天野健太郎訳の『歩道橋の魔術師』(2015 ／白水社) です。現代の台北に生きる人物たちが子どものころに暮らした、今は無き「中華商場」での日々を振り返る 10 篇の連作短編集です。まるで若い頃の村上春樹作品を思わせる、さっぱりとしながら不思議な味わいのある文章と、夢と現実を行き来するかのような一篇一篇の物語は、台湾に興味のない読者にも、同時代の小説として素直に楽しめる作品です。もし台湾の小説を何か読んでみたいと思ったときは、まずこの作品をおすすめします。

文学では他に、世代を超えたシスターフッドの物語『冬将軍が来た夏』(甘耀明／白水紀子訳／2018 ／白水社)、台湾原住民族の巫術を駆使した合戦スペクタクル『タマラカウ物語』上・下／巴代／魚住悦子訳／ 201 2 ／草風館) なども、“読み進む快楽” が得られる作品です。

文学以外でも、一般の読者が気軽に楽しめる台湾のビジュアル系人文書の翻訳出版が増え始めました。例えば､『台湾花模様 美しくなつかしい伝統花布の世界』(陳宗萍／如月弥生訳／ 2018 ／グラフィック社) は、台湾の客家 (はっか。漢民族の一民族集団) の人たちが風呂敷などとして使っていた｢花布｣のパターン集です。また、台湾では築数十年の古い建物をリノベーションして活用する例が増えていますが､『台湾レトロ建築案内』(辛永勝・楊朝景／西谷格訳／ 2018 ／エクスナレッジ) は、実際に見に行けるリノベ建築の例や、そのディテールの鑑賞ポイントなどを、多数のカラー写真で紹介した本です。

花布も、レトロ建築も、おしゃれなものとして、台湾の若い人に好まれています。IT 活用など新しいものをどんどん試す一方、｢伝統的なもの、古いものを今に活かす｣ という価値観も併存している

のが、今の台湾です。“本”から、今のリアルな台湾が見えてきます。

太台本屋 tai-tai books は、台湾の本の版権エージェントとして、この2年間で約20作品の日本版翻訳出版契約を結びました。それらの作品が年末から来年にかけて続々刊行されます。今の台湾の姿が反映され、そして日本の一般の若い読者が読んで面白いと思える作品ばかりを選んでいます。うれしいことに、私たち経由以外でも、同時代の台湾の本の日本での出版が増えているようです。

そこで、台湾の本を読んでみたいけど何から読んだらいいのかわからない、1冊読んで面白かったのでもう1冊読んでみたい、という読者のために、日本で出ている、またはこれから出る台湾の本を紹介する小冊子「TAIWAN BOOKS 台灣好書」を企画、制作しました。内容のPDFが、発行元である台北駐日経済文化代表処台湾文化センターのウェブサイト(https://jp.taiwan.culture.tw)からダウンロードできるようになりました。ぜひご覧ください。

(みうらゆうこ：太台本屋 tai-tai books)